

『お・も・て・な・してナンだ?』

はじめまして。都立富士高校の大野祐介と申します。

突然ですが皆さん、「お・も・て・な・し」覚えていらっしゃいますか？

かの滝川クリステルさんが2020年の東京オリンピック・パラリンピック招致活動の際に日本の文化をこの言葉で紹介なさったのがもう3年も前のことになります。これをきっかけに日本の文化や伝統が国内外からより多くの注目を浴びることになりました。しかし、未だに日本の伝統文化についてイマイチよくわからないまま、外国のお客様をお迎えする準備がどんどん進んでいる毎日に若干の焦りを感じているのです。良くわからない状態でおもてなしできる自信がないのです。

そこで私は世界に紹介できる伝統文化とは何なのか？そのヒントを探しに東京はお台場のパナソニックセンター東京に行って参りました。悩める私にジャストフィットな企画展「文化の力〜暮らしを彩る、ニッポンの美意識」が開かれていました。私の頭を悩ませていた伝統文化が、年齢を問わず大いに楽しめる形で展示されていたのです。

冒頭に申し上げた「おもてなし」。この言葉で皆さんは何を思い浮かべるでしょうか？私は茶道や旅館、割り箸の袋を思い浮かべました。言わずと知れたパナソニックの創業者、松下幸之助さんも茶道に深い関心をお持ちだったようです。パナソニックセンターの富田さんによると、松下幸之助さんは仕事をする心構えとして茶道の持つ「素直な心」を大切にしていたそうです。茶道はおもてなしをする人とされる人が必ず存在します。人の存在が必要不可欠なのです。松下さんはそれを茶道だけでなく、仕事にも必要不可欠だと考えていたそうです。それを「モノを作る前にヒトをつくる」と表現していました。言葉にすると当たり前のように聞こえますが、技術革新が進み自動化や合理化が進んだ現代において案外見落としがちなことではないでしょうか。

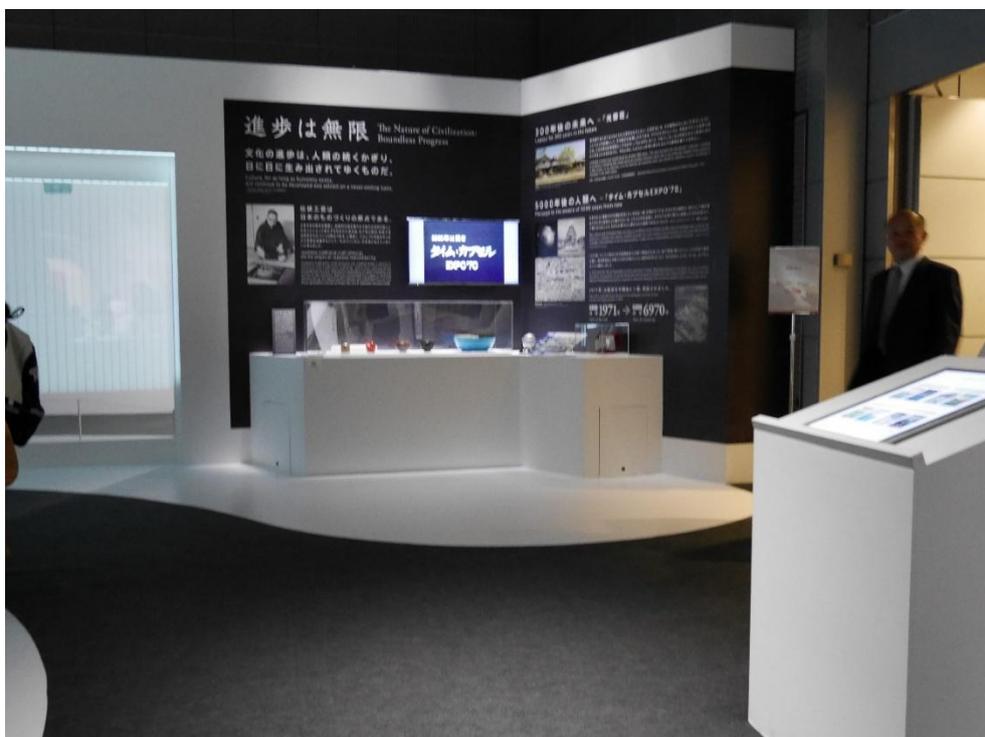
また、茶道具を初めとする工芸品に人一倍の思い入れを持っていたそうです。それは工芸品に込められた職人さんの「道具を使う人への思いや気遣い」に大きく共感したからだそうです。古来から伝統工芸品に命を吹き込んできた職人さんは、常に使う人への配慮を欠かしたことはありませんでした。松下さんもご自分の製品に対して「売って終わり」の製品ではなく「安心して末長く使える」製品作りを目指していたそうです。扱う素材が木や漆から、金属やプラスチックに変わっても道具への思いは現代に至るまで脈々と続いていたのです。

松下幸之助さんの姿勢を垣間見て、1つわかったことがあります。それは、伝統文化は形を変えて私たちのすぐ側にある、ということです。日本の伝統は化石のように古いものを保

存し続けているのではなく、時代に合わせて姿形を変えています。私たちが生きている現代の文化が伝統文化そのものなのです。ですから、ほんのちょっとの「気づく力」があれば日々の生活の中に古代から脈々と伝わる日本の伝統に触れることができるでしょう。文化を学ぶことはカタくて難しい、というイメージを持っていましたが全くそんなことはありませんでした。

こうして私は今回このイベントに参加することで、日本という国の歴史下に大河のようにその時々世相や環境を写しながら流れてきた日本の伝統文化の一端を掴めたような気がします。この東京だけでなく日本という小さな島々に世界中の注目が集まるまであと4年。その日を心待ちにしつつ、この地で暮らしこの手で発展させてきた文化をより多くのお客様に楽しんでもらえるように、私たちの持つ文化とは何かを見極める。これができればオリンピック・パラリンピックは私たちが日頃何気なく見ている日常風景を見つめ直し、この小さな日本が誇る極上の文化を世界の皆さんにも知って頂けるまたとない機会となるでしょう。スポーツとカルチャーが共に盛り上がる2020年はもうすぐそこにまで迫っています。

長々と申し上げましたが私はこの辺で失礼いたします。どこかでまたお目にかかる日を楽しみにペンを...ではなくファイルを閉じます。



(松下幸之助と茶道の関係を紹介したコーナー)